



Reform By Action
RBAタイムズ
 (高円寺阿波踊り) 号外
 発行日/2011年9月7日
 発行/第三企画株式会社
 発行責任者/久米信廣 編集者/牧田司



本場有名連「殿様連」「七彩連」と共同参加

五臓六腑にしみわたる鉦太鼓

音の魔術師 久米連長

「紙業」を太鼓叩きに生かす現場職員

第三企画連の連長を務めるのは久米信廣社長。久米は本場・徳島県出身。高校時代に音楽バンドを結成、アーティストを目指していた。今でも作詞・作曲を手がける。鳴り物では鉦を担当。速く緩く、強く弱く、表情豊かに連員を鼓舞し、観衆を興奮の坩堝に引きこむ。音の魔術師だ。

鳴り物のスタッフは、第三企画の印刷工場のスタッフら14人。力自慢の連中ばかりだ。重さ約7キロの太鼓を腹に抱え、渾身の力を込めて叩く。はしき出された音は、地底から這い昇り五臓六腑にしみわたる。

他の連の太鼓との違いは、鍛え方の違いだ。スタッフの重要な仕事のひとつに「紙業(神業)」というべき「紙さばき」がある。紙が複数枚重なって給紙されるのを防ぐため、印刷機に紙をセットするときに1枚1枚の紙の間に空気を入る作業だ。紙1連(1000枚)の重さは100キロ前後。スタッフは一度に200×400枚(20×40kg)くらいの紙を一気に引き上げ、1枚1枚に隙間なく空気を送り込む。コツは「紙と踊ること」だ。紙と一緒に踊らなければ持ち上がらない。そんな作業を1日に100回は繰り返す。阿波踊りも「紙さばき」も呼吸を合わせ一体にならないと様にならないのは同じだ。

「皆さんの声援が命です。死ぬ気になってがんばります」久米連長は観衆に向かって宣言した。

カンカンカン ドンドンコドン
 チャチャンチャチャンチャチャンチャンドンドン
 ドンドンドン
 ヤットサー ヤットヤットドンドンドン…

ひととき高い鉦の音と太鼓の響きがとろろき渡る。馴染みのコーポレートカラーである黄を基調に赤と黒のデザインが印象的な浴衣姿の第三企画連が登場すると、観衆から歓声が上がる。

第55回高円寺阿波踊りが8月27日、28日、開催された。今年は、東日本大震災の復興支援のため開催時間をこれまでの夜間から午後3時から6時までに変更されたが、例年に近い75連28日、9460踊り子(27・28日と約90万人)の観衆が「阿呆」を演じきった。

第32回から出場している第三企画連は総勢34人が参加。例年と同じ本場徳島の有名連「殿様連」と、鳴り物の迫力で定評がある「七彩連」にも協力を呼びかけ一緒に出場した。



久米信廣「第三企画連」連長



河上周二「殿様連」副連長





稲室寛治「七彩連」副連長

「暴れ踊り」が特徴の一つ 殿様連

「高円寺の観客にはとにかくうけます。拍手喝采になるもんだから踊り子はバテても踊り続けました」「久米連長のノリで踊り子は踊り殺されそうでした」「感動で、少し涙ぐむ連員もいました」

殿様連は、「飲んで、騒いで、楽しく踊ることがモットー。男踊りは、手に弓張提灯を持って、腰を落とし、蹴上げをして踊り、鳴り物の差し込みアップテンポでの「暴れ踊り」が特徴の一つ。高円寺阿波踊りに参加した殿様連のスタッフは次のように自分たちの連のウェブにコメントしている。

他を圧する鳴り物の迫力 七彩連



七彩連(ひちさいれん)は、さまざまな人が集い、人に見せる踊り、楽しむ踊りを目的として1986年に結成。参加条件は男のみで、連員は約80名。連名の由来は様々な個性の人が集まり踊りを楽しもうという考えから。

本場の七彩連を見た観衆が「すごかったですね。感動です。踊りもワンダフルでしたが、バックの音曲がド迫力」とネットに書き込んでいるように、鳴り物は他の連の音をかき消す迫力がある。